

信州大学人文学部歴史学コース東洋史学領域(豊岡研究室・新津研究室) 紹介 (2024 年 9 月増補改訂)

目次

内容

研究室の教育目標	2
研究の射程	2
歴史学コース東洋史学研究室のカリキュラム構成	2
A)	2
B)	3
C)	3
卒論についての余談	4
歴史学コースで外国史を扱おうと考える方へ	4
語学について	4
歴史学コースでの外国史研究に向いている方、向いていない方	4
留学について	5
隣接学問分野・コースとの協同・差異	5
見学の機会	6
進級志望調査票の書き方（歴史学コースの場合）	6
進級受入要件（コース）	6
卒業論文のテーマ	6
卒業後の進路	8
担当教員（研究経歴・業績などは SOAR・Researchmap 参照）	8
進級に際して読んでもらいたい書籍リスト	8



研究室の教育目標

本研究室(旧東洋史分野)では、おもにアジア地域の、あるいはアジア地域にかかわる歴史的事象について、従来の学術的な研究成果を駆使するとともに、多種多様な言語・材質からなる史料をみずから探し出して、科学的・実証的な観点から分析を加えることのできる人を育成することを目的としています。このプロセスを経て、現代社会を生きるうえで必須の情報分析・処理能力をかたちづくれることが期待されます。

本研究室がとりあつかう東洋史学を学ぶことは、第一義には、アジア地域の過去と現在を知ることです。しかし、学問的な訓練を受ける中で習得される技能は、過去だけではなく、いまそこにある現実を読み解くためにも使われるべきです。歴史学は単に過去の事実を明らかにするだけのものではありません。東洋史学を学ぶことを通じて、現実を冷静に見据え、賢く生きる術が身につけられることでしょう。

研究の射程

もともと日本の東洋史学は、国史(日本)・西洋史(ヨーロッパ・アメリカ)以外のほとんどの部分をカバーする、きわめて広範な射程と深みを持った学問分野です。東洋史学という学問領域のなかには、おおむね東アジア・北東アジア・中央アジア・東南アジア・南アジア・西アジアの地理区分があり、それぞれの地域の歴史的展開についての研究が行われています。そして、その連環も決して忘れてはなりません。このファイルの冒頭の写真は、中華人民共和国福建省の古い港町泉州(マルコ・ポーロ『東方見聞録』ではザイトン Zaiton として登場します)にある、イスラーム教の礼拝堂(モスク)です(2006 年撮影)。そこには 1000 年以上におよぶ交易・文化交流・社会の中の衝突と受容の歴史があります。背景の広さ・多様性とつながりを意識することが東洋史学の醍醐味でもあります。

東アジアの古代・中世・近世の歴史は、どこをやっても漢文が必要です。漢文は、朝鮮・ベトナム・日本でも使われてきたし、また中国における記録から、東アジア・東南アジア・内陸アジアの多くの地域の記録が、中国で残されたものしかない場合がしばしばあるからです。漢文は、ある時期までユーラシア大陸東部地域の共通言語でした。漢字と漢文が示してくれる世界はとても広いのです。いっぽうで、近世・近代の東アジアの歴史は、多様な言語を用いて検討しなければなりません。現地の言葉に加えて、英語・フランス語・オランダ語・ポルトガル語・スペイン語・日本語など多様な言語で書かれた史料が用いられます。多様な目で、ひとつひとつのことが記録されてきたのです。東洋史学は、広すぎて深すぎるとも言えるかもしれません。

なお、本研究室では、おおむね学生さんの希望に沿って、古代から近現代まで柔軟に研究テーマの設定が可能です。よく「××はできますか?」みたいな質問を受けますが、だいたい「(本人の努力次第で)できる」とお答えしています(なにが「だいたい」なのかは、相談会などで聞いて下さい)。

なお「なんでもできる」とはいうものの、それにはもちろん「歴史学のディシプリン・方法論をもちいて」という条件はつきます。歴史学コースだから当然ですね。「歴史学のディシプリン・方法論」というのも一口で言うのは難しいのですが、様々なスパンの時間軸をもとに考える、史料批判をきっちり行う、ということになるでしょうか。「現代のことだけ知りたい」「アンケート取って終わりにしたい」「当事者にインタビューしたら満足」みたいなのはダメよ、ということです(当たり前ですが、そんな甘い考えでは、どのコースでもダメです)。

歴史学コース東洋史学研究室のカリキュラム構成

東洋史学には、必ずしもかっちりしたカリキュラム構成はありません。これは、東洋史学がカバーするフィールドが広大かつ多様であることによります(例えば「日本軍占領下の香港」と、「10世紀ジャワの商慣習」といったテーマを勉強するときに、同じステップを踏むとは普通思えないですね)。研究を進めるうえで、念頭に置かれる地域・時代によって習得すべき知識・技能も極めて多様なものになります。ただし2年次、3年次にそれぞれ達成しておいてほしい段階というのはありますし、卒論作成に際してだいたいこれくらいで、というプロセスもあります。

以下、具体的な演習の授業の内容と、それ以外にしてもらう作業について述べます。

A) 講義受講の際の注意

東洋史概論のほか、日本史概論・西洋史概論もあわせて10単位(5コマ)が必要です。要するに歴史

学コースの概論は基本的に全部出ておけ、ということです。特論は、なに史特論でもいいのでたくさん出て勉強してください。ほかにも、もちろんいろいろ単位をちゃんと取ってもらいますが、基本的に4年次に上がる段階で取り残しはない状態にしてもらいます。4年の後期に「卒論書いたんですけど、あと4単位残ってて〜 期末試験が心配で〜」などと言われると教員はとても心配します(でも助けてはあげられません…)

B) 演習で行うこと

2年次には、基幹演習を通じて、①自分の研究テーマにかかわる先行研究の包括的な把握、②専門的な辞書など工具書を利用しながら、外国語、日本語の史料を読む基本的な作法を習得することが望めます。とにかくこまめに専門的な辞書を引くこと、自分の浅はかな知識や根拠のないイメージに頼らずに史料に向き合うこと。これらを意識できるようになることが目標です。

研究室配属後の**3年次**には、発展演習を通じて専門書・学術論文などについての批判的な扱い方を習得します。専門的な研究の基盤となる一般的な知識を把握しつつ、専門書・学術論文の内容について、鵜呑みにすることなく、内容を吟味し、同時に、その業績をこれまでの研究のながれのなかに位置付けられるようになることが目標です。

C) 卒業論文執筆

4年次には、卒業論文を執筆します。自分の関心と社会の状況、先行研究の到達点などを勘案しながら、テーマを選び、調査・分析を行い、論文をまとめます。自ら学術的な営みを体験することにより、具体的な歴史的事情への造詣を深めるのみならず、社会における様々な問題解決に学術的なリソースを用いることが出来るようになることを目的とします。

なお、卒業論文は「なにかの歴史を書くもの」ではありません。新書にある概説的な歴史叙述(何年に誰が死んだの、何年にどういった制度ができたの)は不要です。そういうのをドラドラ書くのは時間とリソースの無駄です。卒業論文は「ある歴史的な事象について、どのような背景のもとに発生して、その後どのような影響をもたらしたのか」を明らかにするものです。ものすごくピンポイントなんですが、そのピンポイントで明らかにできたことを、もうちょっと大きな歴史の流れの中に位置づけるのが、卒業論文です。論文は物語ではないのです。この部分が、歴史小説や歴史漫画との大きな違いであると言えるでしょう。

具体的な執筆プロセスは以下の通りです。

3年次 1-3月に、そこまで検討対象としてきた地域・時期についての先行研究をもとに概略を書いてもらうことにしています。つまり3年次終了までに、研究者たちが何を問題とし、どのような史料を用いて、何を明らかにしてきたのか、概略を把握して説明できるようになってもらう、ということです。前述の発展演習での報告や読書メモの作成を通じて論文・著作は読んでいるはずなので、そんなに手間はかかりません。これをふまえて4年次の卒論執筆が始まります。

4月に前年度末までにまとめた概略をふまえて題目届を出します。この題目は、論文の具体的なタイトルというよりテーマ設定というべきものになるでしょう(この題目は提出まで変えられません)。題目届を考えながら、自分は何が明らかにし、指摘できるのかを考えます。4年次前半は就職活動や公務員試験などで落ち着かないでしょうから、その間は関連する論文・著作を読み、暇を見つけて史料を集めてもらいます。(松本が)涼しくなる頃にはいろいろ落ち着いてくるでしょうから、史料を読みつつ、9月末を目処に、進捗報告をしてもらいます。この段階で史料が集まっている(あるいは目処がついている)状態でないとちょっと困ります。ここから本格的に集めた史料を読んで、何が書いてあるのか、何が分かるのか、分析を加えて、実証を積み重ねていきます。これらの実証をふまえて、ある一定の歴史的に意義のある事実を明らかにし、その位置づけ、意義を考えながら、本文を執筆していきます。

これらの作業を通じて、歴史的な思考(ある事柄についての研究蓄積を収集・整理し、概略を把握した上で、研究上の課題の存在を指摘し、その課題を解決すべく、史料を読み直し、新しい実証・分析を行い、一定の主張を行う)が身につくことと思います。同時に、取り上げた時期・地域のある事柄に関するエキスパートになることが期待されます。

卒論についての余談

こんなことを1年生向けに書くのはどうか、という気がしないでもありませんが、東洋史学で卒論書くのはそれなりに大変です。テーマが決まって、ちゃんとテーマに合わせて学術書・学術論文を読み、史料を探してきて読めれば書けるのですが、就活もあるし、そもそも(論文が書けるような、ちゃんとした)テーマに絞りこむのも大変だし、学術論文・学術書を読むのも時間がかかるし、心折れることもあるでしょう。折れると内定先に頭下げて取り消した上で留年です(きっぱり)。そもそも単位を揃える段階で心が折れることもあるでしょう。それも留年です(きっぱり)。教員はできるだけサポートをしますが、やるのは学生さんご自身です。そのあたりの覚悟はしてください。自分で手と頭を動かさないと卒業できません(きっぱり)。動かし方はもちろん教えます(目次ばかり何度も作り直してないで史料読みなよ、とか。(逆に)史料だけじゃなくて目次作りなよ、とかリストとか表にすると色々気がつくよ、とか。この本も読みなさい、とか)。でも動くのはご自身です。担当教員は、大学生は自分のことは自分でできる、自分で動ける大人だと思っています。このへんの、「**自分でやる**」という**心意気**がない場合は、歴史学コースはやめといたほうがいいと思います。もちろん、これは人文学部のどのコースでも共通のことではあるので、ここに限ったことではないのですが。

同時に、学生さんには、一人で卒論書けると思うな、ともいつも言っています。普通、学術論文を書いたことのある大学生というのはいません。一人で考えてても大したものを書けないので、相談してください。担当教員はそれに対して、アドバイスをします。それに対応してくればなんとかなるようにこちらも考えています。わかんないことは聞いたほうが早い。しなくていい苦労はしなくていいですよ？

卒論を書き上げた方は、結構それなりの達成感ともうちょっと出来たかな、という懺悔を得てくださっているようです。「こんなに頭を使ったことはなかった」と言って下さる卒業生もいました(あるいは、もっと早い時期に教員に相談しておけばよかった、という声も)。卒論を書くというのはとても面倒で、でも意味のあるものだろうと思います。基本的に、本研究室は「卒論を書く」ことを最終目標にカリキュラムを組んでいるので、もし進級をご検討の場合は、そのへんはぜひともご理解ください。

あと、よく聞かれるのが卒論で求められる水準です。分量には特に下限はありません。大部(A4 80 枚とか)だと読むほうが辛いので勘弁して欲しいと言っています。また、内容のレベルは、担当教員が知らないこと(「へえ」というようなこと)を論理的に根拠とともに提示できれば OK です。担当教員は教養が広くも深くもないので簡単だろうと思いますけど。なお、稀に「学会の常識を覆す！」とか「ある地域の歴史をすべて網羅する！」とか言い出す方がいますが、そういう気宇壮大なのは無理です(無理というか、炎上すらし得ないダメなウェブ記事みたいなしか出来ないというべきでしょうか)。そのへんはテーマ設定の妙なので、ちゃんと指導を受けてください。

歴史学コースで外国史を扱おうと考える方へ

語学について

東洋史学でも西洋史学でも、日本以外の地域について研究する学問分野なので、必然的にその地域の文字や言語を利用する必要があります。日本の中等教育まででは触れることのない言語、本学では初修外国語として開講されていない言語が多くあります。これまでに勉強していないものでも構いません。それぞれの言語の習得方法については、適宜指導を行います。ただし、教えるのは「習得方法」であって、言語そのものではありません。語学は自分で勉強してもらいます。

歴史学コースでの外国史研究に向いている方、向いていない方

歴史学コース東洋史学領域では、1年次に特定の授業(日本史概論・東洋史概論など)の受講していることなどを受入れの条件とはしていません(ただ、歴史学コースの概論を1年次に1つも履修したことがないと、2年次以降、だいぶ辛い……。また、上述の事情があるので、特定の語学(例えばフランス語・中国語・韓国朝鮮語など)についての学習経験も求めません(上の「語学について」も参照)。ただし、英語以外の外国語を勉強するつもりのない方、日本以外の地域に関心のない方はやめておいたほうがよいでしょう。べつに流暢に外国語を話せるようになることが必要なわけではありませんが、3年も在籍して自分が研究した地域の言語の辞書も引けない(＝時間をかけて、辞書や文法書も使って「読む」ことができない)ようでは話になりません。

歴史学コースでは、基本的に、一人に一つの専門を設定することを求めます。教員はヒントや、地雷

の存在について示唆はしますが、**自分の研究は自分です。**そのため、同じ研究室でもだれかと一緒に同じ史料・文献を調査・分析することはあまりありません(むしろ取り合いになると困る…)。資料室で本を読んでいる学生をよく見かけますが、かれらは一緒にいて、談笑しながら本を読んでも、その本の内容はそれぞれで、みな違うものを勝手に読んでいます。共同作業にこそ喜びを覚えるようなタイプの方は止めておいた方がよいかもしれません(資料室の管理・運営などには協力していただかないと困りますが)。

なお、本研究室ではイベント事はあんまりやりません。ざっとあげると、

4月下旬:進級者歓迎の宴

9月下旬:東洋文庫(文京区)・東京大学アジア研究図書館(文京区)・アジア経済研究所図書館(千葉市)など見学日帰り現地集合現地解散ツアー

11月下旬:信大史学会(会費1000円徴収されます/自由参加)

1月前半:進級面接

2月初旬:卒論口頭試問/卒論通過祝賀の宴

くらいです(思ったよりある…。時期は毎年多少前後します)。合宿などはありません。海外調査もありません。

留学について

めっちゃ応援します。機会(と経済的な余裕)があれば、ぜひ行ってください。担当教員がカバーできる部分については最大限配慮します。

隣接学問分野・コースとの協同・差異

東洋史学は、ヨーロッパ・日本・南北アメリカ以外すべてをカバーする学問領域です。そのため、多くの学問分野と重なる部分があります。

例えば、日本史学とは、古代から現代に至る日中関係・日朝関係など日本の対外関係については、重なる部分があります。この場合、どちらに軸足を置いて考えたいのかが重要になります。外国と日本の両者の思惑や、外国からみた日本について考えるなら、東洋史学のほうがよいし、日本の立場を考えるなら日本史学のほうがよいかもしれません。

西洋史学とも、たとえば、アフリカ、インドや東南アジアでの欧米諸国による植民地統治などをめぐって研究が重なります。東アジア・中央アジアなどでの西ヨーロッパの人々の活動なども重なる部分です。実際、東洋史学の研究者は、ヨーロッパの文書館にも頻繁に出かけます(自分のフィールドよりも、むしろ世界各地の情報が集まるたとえばロンドンの国立文書館のほうが同業者によく遭遇するのです)。ヨーロッパの中で完結することは西洋史のほうがよいでしょうが、グレーゾーンになりそうなところ(例えば、オスマン帝国やロシア帝国は伝統的にヨーロッパの国際関係に含まれていますがアジアっぽさが濃厚な政権です。西アジアは東洋史・西洋史どちらでも取り扱います)についてどちらで勉強するかは、好みの問題です。歴史学コースの各領域の必要習得単位は重複していますので、特に講義形式の授業については、どの領域でも取る授業はあまり変わらないともいえます。周りで一緒に勉強する仲間とどのような話をしたいのかを考えながら選ぶと良いかもしれません(といっても、本研究室所属のメンツのなかでもやってる内容がかぶることはあんまりなかったりしますが)。

比較言語文化コースとも、例えば植民地における文学などにおいて、重なる場合があります。たとえば、20世紀前半の上海やハノイについて語られた文学作品で、英語やドイツ語、フランス語、日本語などで書かれている場合、東洋史学のみならず、比較文学・英語文学・ドイツ文学、フランス文学、日本文学にも関わるというのは、ご理解いただけるだろうとおもいます。これを言い出すと、哲学・芸術論コースとも関係がある、ということになります。

中国語学・文学や哲学とも、中国という部分で重なる部分が大いにあります。**東洋史学は、社会経済史・政治史を中心とした学問分野です。**人間ひとりひとりの考えや文化的事象よりも、**社会・経済構造や政治構造などへの関心が強い学問分野です。**また、よその地域との連関を強く意識するものです。人々の暮らしなど社会状況などは、東洋史分野で扱われます。著作を残すような人物の思想は中国哲学、文学作品の内容や言語学的な分析は中国語学・文学分野で扱われます。あと、「中国人とはどのようなひとびとなのか」「何を考えているのか」といったことも、どちらかといえば中国語学・文学の守備範囲でしょう。東洋史だと「中国政治・経済はどのような構造をもっているのか?」という事を扱います。細かいところは教員にお尋ねください。

見学の機会

コース相談会の日程をご確認ください。東洋史学領域では、東洋史資料室(人文棟3階)見学を常時受け付けています。とはいえ、突然おいでいただいても正直困る(誰もいないときは施錠しています/卒業論文執筆・ゼミ報告準備などで修羅場まっただなかの怖い顔した学生がいるかもしれない)ので、希望者は事前に教員(豊岡・新津:連絡先は担当科目のシラバスなどで確認してください)にメールで、あるいは担当の授業前後などにご相談ください。歴史学コースのなかでも、東洋史学領域の研究室について、第2希望でも第3希望でも書くつもりがある場合は(他のコース、歴史学コース内の他領域と迷っている場合も)、必ずコース相談会か、あるいは教員にアポ取って、話に来てみてください。進級面接の短い時間(一人10分とか)だけで決めちゃうのは、お互い大変です。3年間のお付き合いになるわけですから、慎重にちゃんと話を聞いて決めましょうね。

進級志望調査票の書き方(歴史学コースの場合)

進級志望調査票は何を書いたらいいかわからないとお思いの一年生が多いと思います。そこでこういう事を書いておいてくれる(担当教員的に)助かるという事を書いておきます。なお当たり前ですが、書いてある文章が支離滅裂だともうこうもありません。他所のコースはよくわかりませんし、先生方にはそれぞれお考えがあるので、直接聞いてみたら良いかもしれませんが(それで喜んで教えてくれる先生はいい先生よ)。

- 1 関心のある地域・時代あるいは歴史用語・概念など(あんまりざっくりでは困る/複数可)
- 2 なぜそれに関心を持ったか(とくに真面目な理由でなくて構いません/複数可)
- 3 何語の史料を利用してみたいか(具体的に/複数可)

ここでこういう事を書くのもおかしな話ですが、学んでいく中で**興味関心は変わります**。むしろ変わらないのは成長がない、とみなすべきかもしれません(別に変えろ、って話でもありませんが)。なので、あんまり遠慮したりせず、その時の興味関心をズバッと書いてください。なお言うまでもないのですが、その関心について「前に聞いたことがあるんですけど〜」みたいな感じで話されるとこっちも「聞いただけで調べたことないんか(#ω^)#」図書館の本くらい読まんと学費の無駄だぞう(###ω^)」となりますので、適宜図書館などで調べて書いてください。研究室教員担当授業のシラバスに書いてある参考文献や、このファイルの末尾にある「進級に際して読んでもらいたい文献リスト」もぜひ御覧ください。

なお、大学で、学生さんの関心を知って、それに応じて教育をしようとしているのは、学生さんの好き嫌いを大事にしているから、ではありません。学問は、やっていると面白くなるのですが、最初はやっぱり大変です。その大変さを乗り越えるには、ちょっとでも興味関心があることでないと我慢できないだろうから、学生さんの関心を知って、せめてなりとも楽しくできるように、と大学という社会制度が出来たときに、当時の先生方が頭を捻って工夫したのです。なので、「とりあえず進級するために関心をでっち上げとこ〜」みたいな志望調査票を書く、あとでメッチャ後悔します。むしろ、このテーマなら時間と労力を投入してもいいと思えるものを、と考えるとよいのかもしれませんが。頑張れ。

進級受入要件(コース)

指定の共通教育の単位数(21/専門科目はノーカウントです。細かくは学生便覧を見てください)が取れる見込みがあることはもちろんですが、これに加えて、秋に行われるコース相談会に参加していること(指定の日時に質問の機会をもうけるから見にきてね、というだけです)、歴史学コースの概論・共通教育の歴史学コース教員担当授業(名前が変わる事があるのでシラバスをよく見てください)のいずれかを受講していることの2点を条件とします。**都合がつかず、コース相談会に参加できない場合は、シラバスでメールアドレスを調べたり、あるいは授業の前後などに個別に教員に連絡してください。**あと、この説明文を読んでも条件にしていますが、ここに書いても仕方ないですね(というより、これくらいの文書をチャチャッと読めないようだとは歴史学は厳しいともいうべきか…)。

教員の能力と資料室の容量を鑑みて毎年の受入人数上限はコース全体で20名程度(教員4名で1人あたり学生5名程度。東洋史学研究室は教員2人なので10名程度)です。あしからずご了承ください。なおGPAによる足切りなどはしません。1年生の前期分のGPAだけ見てもあまり意味がないからで

す(担当授業のコメントペーパーや試験の答案などはがっちり見ます)。

志望調査表や面接では向き不向きを見ているので、受入上限に達していなくても他コースでの話を聞くようお話することもあります。その関心だとうちのコース・領域・研究室ではあまりハッピーではなかろう、ということですので、ご了解ください。あと、後悔が残るといけないので、よそのコースの話を聞いてきなさい、というふうに言う場合もあります。なべて進級面接は選抜ではなく、マッチングだと考えていますので、迷いがあれば迷いがあるとはっきりお申し出ください。

なお、東洋史学領域で扱う研究内容は、高校の教科では世界史と最も密接に結びつくものですが、受け入れにあたって大学入学以前の学習歴は問いません。研究テーマによっては世界史よりも日本史や倫理、芸術などの知識が必要になることもありますし、高校世界史の成績が良かったから卒論がすつと書けた、ということもまれです。もちろん知識があるに越したことはありませんが(学習経験があると、たぶん進級志望調査票は書きやすいはず)、コースでの学びは同じボールで別の競技をするようなものだとお考えください。

卒業論文のテーマ

近年のテーマは以下の通りです。

- 「人民共和国成立期の中ソ関係」(2011 年度)
- 「上海における西洋文化の受容と変容」(2013 年度)
- 「中国の革命運動における資金調達: 金銭的なやりとりから見る辛亥革命」(2014 年度)
- 「日韓の歴史認識をめぐる: 日韓歴史教科書研究交流の視点から」(2015 年度)
- 「満州国をめぐる国際関係」(2015 年度)
- 「現代インド社会と経済発展」(2015 年度)
- 「日中戦争期の通貨と金融: 日本の偽札工作について」(2015 年度)
- 「明代江南における地域社会: 地方志から見る社会秩序変化の考察」(2016 年度)
- 「中国における近代国家の形成と女性: 清末の女性教育について」(2016 年度)
- 「現代中国の計画出産」(2016 年度)
- 「中国国民政府期の教育政策: 日中戦争期における教育方針と学生の救済」(2016 年度)
- 「旧日本軍兵士の男性性: 軍教育と性意識からみる日中戦争期の性暴力」(2016 年度)
- 「戦後韓国の経済発展における農村社会: 農地問題・食糧問題を中心に」(2016 年度)
- 「中国共産党の図像プロパガンダ: 宣伝画の民衆への浸透と様式・特徴の変遷」(2017 年度)
- 「在日朝鮮人運動と生活困窮問題: 生活保護、帰国事業のなかの祖国防衛」(2017 年度)
- 「マレーシアにおける近代的教育制度と宗教」(2017 年度)
- 「漢代の文書行政: 文書の伝達を中心に」(2017 年度)
- 「台湾総督府の衛生事業: 衛生事業に協力した台湾住民」(2017 年度)
- 「アメリカ統治期フィリピンのムスリム」(2018 年度)
- 「裁判からみる清代の宗族」(2018 年度)
- 「香港と移民問題」(2018 年度)
- 「20 世紀オスマン帝国における非ムスリム」(2018 年度)
- 「イギリスの「グレートゲーム」認識」(2018 年度)
- 「フランスにおけるシオニズム形成」(2018 年度)
- 「英領マラヤの移民管理制度」(2018 年度)
- 「真宗大谷派の「帝国日本」朝鮮・台湾における布教・社会事業」(2019 年度)
- 「大躍進期のメディア政策: 大躍進期のメディア報道～『人民中国』、『人民日報』におけるスローガン利用」(2019 年度)
- 「後漢・魏晋期の辺境政策: 羌に対応する異民族統御官を例に」(2019 年度)
- 「日本統治期台湾におけるツーリズム」(2019 年度)
- 「元代の南海交易」(2019 年度)
- 「海峡植民地のアヘン」(2020 年度)
- 「ラオス王国と国際関係」(2020 年度)

「朝鮮アナキストの植民地朝鮮認識：申采浩の思想を通して」(2020 年度)
 「中国と長野県：戦後 75 年目の中国残留日本人家族」(2020 年度)
 「日本統治期台湾の原住民「国語」教育」(2020 年度)
 「第二次世界大戦後のフィンランド外交」(2020 年度)
 「日本統治時代台湾の漢人教育」(2020 年度)
 「五四時期の傅斯年」(2020 年度)
 「盛世才と新疆：民族政策を中心に」(2020 年度)
 「道光年間のアヘン政策決定過程：道光帝の認識から考える」(2020 年度)
 「魏晉南北朝期の東アジアの国際関係：451 年の済の官爵号の授与と中国と朝鮮」(2021 年度)
 「16～17 世紀東アジアにおける人身取引 豊臣秀吉による朝鮮出兵と降倭」(2021 年度)
 「東南アジアの域外貿易とカンボジア」(2021 年度)
 「中ソ関係と在華利権」(2021 年度)
 「近代中国の綿産業」(2021 年度)
 「唐代シルクロードの文化交流」(2021 年度)
 「日本占領下のマレー半島：対華人政策を中心に」(2021 年度)
 「明代中期の政治構造：大礼の議における皇太后の勢力変動」(2022 年度)
 「帝国日本の大衆文化：台湾芸術新報から見る台湾在住民の文化」(2022 年度)
 「近代中国における衛生事業」(2022 年度)
 「蔣経国時代の台湾：中華民国総統 1 年目に注目して」(2022 年度)
 「農村調査からみる華北農村」(2022 年度)
 「フルシチョフ時代の対中外交」(2022 年度)
 「オスマン帝国における女子教育：英米との比較と当事者の記録から」(2022 年度)
 「改革開放以降の国有企業と民間企業」(2022 年度)
 「北宋の物流：沿邊三路における 軍糧調達を中心に」(2022 年度)
 「前期倭寇の季節性：『高麗史』、『高麗史節要』の倭寇関連記事を中心に」(2023 年度)
 「駐英公使薛福成の外交思想：領事設置と国境画定を中心に」(2023 年度)
 「甲午農民戦争と東アジア国際関係：同時撤兵・宗属関係をめぐって」(2023 年度)
 「日中戦争期の国共関係：皖南事変を中心に」(2023 年度)
 「戦中・戦後初期の中国共産党」(2023 年度)
 「日中戦争期の対日和平派：周仏海を中心に」(2023 年度)
 「民主化と光州事件：兵役法の視点から」(2023 年度)
 「明末清初の郷紳：『明実録』における郷紳」(2023 年度)
 「現代中国のボルノ規制：1980～2000 年代の「掃黄」を中心に」(2023 年度)

卒業後の進路

特別な仕事に就く例はありません。近年は公務員(県庁・市役所／長野県内も地元も)が多く、一般企業(業種も様々)が続きます。信州大学の職員になる方もいます。教職免許(社会・地理歴史・公民)を取得する学生さんもそれなりにいます(最近、中高の先生になってくれる方もいて、とても嬉しい)。県内にも、地元にも、あるいは東京や大阪にも、いろいろなところに進路を見つけています。

大学院進学を希望する方ももちろん受け付けます(むしろとても喜ぶ)が、その場合には相応の指導をします(キツイのか、ユルイのかは受け手の感覚次第ですが)。適宜ご相談ください。

担当教員 (研究経歴・業績などは SOAR・Researchmap 参照)

① 豊岡康史(TOYOOKA Yasufumi)。1980 年生。博士(文学/東京大学大学院人文社会系研究科、2010 年)。専門は清朝 18・19 世紀史、特に政治史、経済史、国際関係史。

よく使う文書館は、故宮博物院圖書文獻館(台北)、中央研究院歴史語言研究所(台北)、中国第一歴史檔案館(北京)、英国図書館(ロンドン)、英国公文書館(キュー)、澳門歴史檔案館(マカオ)。

②新津健一郎(NIITSU Ken'ichiro)。1992 年生。博士(文学/東京大学大学院人文社会系研究科、2022 年)。

専門は漢唐間の西南中国地域社会史。出土文字資料(とくに石刻史料)研究、東部ユーラシア広域史を視野に入れた山間地域史・境界地帯史。

よく行く博物館は、東京国立博物館東洋館、中国国家博物館(北京)、四川省博物院(成都)、ベトナム国家歴史博物館(ハノイ)。よく使う学外の図書館は、国立国会図書館、東洋文庫図書室、東京大学文学部図書館漢籍コーナー・東洋文化研究所図書室。

進級に際して読んでもらいたい書籍リスト

タイトルの通りです。進級志望調査票の「2」に関わる時代・地域に関する書籍はぜひ図書館等で読みください 1 年次の時点で読みこなせなくても問題ありませんが、進級面接の際に「なにそれ？」みたいな感じだと困ります。

中国

・秦以前

- ・竹内康浩『中国王朝の起源を探る』山川出版社(世界史リブレット)、2010 年。
- ・落合淳思『殷：中国史最古の王朝』中央公論新社(中公新書)、2015 年。
- ・佐藤信弥『周：理想化された古代王朝』中央公論新社(中公新書)、2016 年。

・秦／漢

- ・鶴間和幸『秦漢帝国へのアプローチ』山川出版社(世界史リブレット)、1996 年。
- ・宮宅潔『ある地方官吏の生涯：木簡が語る中国古代人の日常生活』臨川書店、2021 年。
- ・小嶋茂稔『光武帝：「漢委奴国王」印を授けた漢王朝の復興者』山川出版社(世界史 リブレット 人)、2023 年。

・三国／両晋／五胡／南北朝

- ・石井仁『曹操：魏の武帝』新人物往来社、2010 年。
- ・三崎良章『五胡十六国：中国史上の民族大移動』東方書店、2012 年。
- ・窪添慶文編『魏晉南北朝史のいま』勉誠出版(アジア遊学)、2017 年。
- ・会田大輔『南北朝時代：五胡十六国から隋の統一まで』中央公論新社(中公新書)、2021 年。

・隋／唐

- ・石見清裕『唐代の国際関係』山川出版社(世界史リブレット)、2009 年。
- ・河上麻由子『古代日中関係史：倭の五王から遣唐使以降まで』中央公論新社(中公新書)、2019 年。
- ・森部豊『唐：東ユーラシアの大帝国』中央公論新社(中公新書)、2023 年。

・五代／宋／遼／金／西夏

- ・平田茂樹『科挙と官僚制』山川出版社(世界史リブレット)、1997 年。
- ・杉山正明『遊牧民から見た世界史』増補版：日本経済新聞出版社(日経ビジネス人文庫)、2011 年。
- ・大澤正昭『妻と娘の唐宋時代：史料に語らせよう』東方書店、2021 年。

・元

- ・岡田英弘『モンゴル帝国の興亡』筑摩書房(ちくま新書)、2001 年。
- ・白石典之『モンゴル帝国誕生』講談社(メチエ)、2017 年
- ・森平雅彦『モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島』(世界史リブレット)、2011 年。

・明／清

- ・岡本隆司『清朝の興亡と中華のゆくえ 朝鮮出兵から日露戦争へ』(叢書「東アジアの近現代史」第 1 巻、講談社、2017 年。
- ・岸本美緒『東アジアの「近世」』山川出版社(世界史リブレット)、1997 年。
- ・中島楽章『徽州商人と明清中国』山川出版社(世界史リブレット)、2009 年。

・清朝末期／民国

- ・岡本隆司『近代中国史』(ちくま新書、2013 年)
- ・田中比呂志『袁世凱: 統合と改革への見果てぬ夢を追い求めて』山川出版社(世界史リブレット人)、2015 年。
- ・山室信一『キメラ—満洲国の肖像 増補版』中央公論新社(中公新書)、2004 年。

・人民共和国

- ・梶谷懐『日本と中国経済: 相互交流と衝突の一〇〇年』筑摩書房(ちくま新書)、2016 年
- ・梶谷懐『中国経済講義: 統計の信頼性から成長のゆくえまで』中央公論新社(中公新書)、2018 年。
- ・熊倉潤『新疆ウイグル自治区: 中国共産党支配の 70 年』中央公論新社(中公新書)、2022 年。
- ・笹川裕史『中華人民共和国誕生の社会史』(講談社メチエ、2010 年)

朝鮮

- ・木村幹『韓国現代史: 大統領たちの栄光と蹉跎』中央公論新社(中公新書)、2008 年。
- ・森万佑子『韓国併合: 大韓帝国の成立から崩壊まで』中央公論新社(中公新書)、2022 年。
- ・六反田豊『朝鮮王朝の国家と財政』山川出版社(世界史リブレット)、2013 年。

台湾

- ・戴国輝『台湾: 人間・歴史・心性』岩波書店(岩波新書)、1988 年。
- ・若林正文『台湾: 変容し躊躇するアイデンティティ』筑摩書房(ちくま新書)、2001 年。

香港

- ・倉田徹・張頤馨『香港: 中国と向き合う自由都市』岩波書店(岩波新書)、2015 年。

内陸アジア

- ・稲葉稜『イスラームの東・中華の西: 七〜八世紀の中央アジアを巡って』臨川書店、2022 年。
- ・梅村坦『内陸アジア史の展開』山川出版社(世界史リブレット)、1997 年。
- ・小松久男『近代中央アジアの群像: 革命の世代の軌跡』山川出版社(世界史リブレット人)、2018 年。

東南アジア

- ・白石隆『海の帝国: アジアをどう考えるか』中央公論新社(中公新書)、2000 年
- ・中西嘉宏『ミャンマー現代史』岩波書店(岩波新書)、2022 年。
- ・弘末雅士『海の東南アジア史: 港市・女性・外来者』筑摩書房(ちくま新書)、2022 年。
- ・桃木至朗『歴史世界としての東南アジア』山川出版社(世界史リブレット)、1996 年。

南アジア

- ・粟屋利江『イギリス支配とインド社会』山川出版社(世界史リブレット)、1998 年。
- ・吉岡昭彦『インドとイギリス』岩波書店(岩波新書)、1975 年。

西アジア

- ・小笠原弘幸『オスマン帝国: 繁栄と衰亡の 600 年史』中央公論新社(中公新書)、2018 年。
- ・内藤正典『トルコ: 建国一〇〇年の自画像』岩波書店(岩波新書)、2023 年。
- ・林佳世子『オスマン帝国の時代』山川出版社(世界史リブレット)、1997 年。

東アジア国際関係

- ・上田信『戦国日本を見た中国人: 海の物語』日本一鑑』講談社(メチエ)、2023 年。
- ・及川琢英『関東軍: 満洲支配への独走と崩壊』中央公論新社(中公新書)、2023 年
- ・加藤聖文『「大日本帝国」崩壊: 東アジアの 1945 年』中央公論新社(中公新書)、2009 年
- ・河内春人『倭の五王: 王位継承と五世紀の東アジア』中央公論新社(中公新書)、2018 年。
- ・関幸彦『刀伊の入寇: 平安時代、最大の対外危機』中央公論新社(中公新書)、2021 年。
- ・園田茂人『アジアの国民感情: データが明かす人々の対外認識』中央公論新社(中公新書)、2020 年
- ・服部龍二『日中国交正常化: 田中角栄、大平正芳、官僚たちの挑戦』中央公論新社(中公新書)、2011 年
- ・村井章介『中世倭人伝』岩波書店(岩波新書)、1993 年。

その他(通史シリーズなど)

- ・吉澤誠一郎監修、石川博樹ほか編『論点・東洋史学』ミネルヴァ書房、2022 年。
- ・礪波護、岸本美緒、杉山正明編『中国歴史研究入門』名古屋大学出版会、2006 年。
- ・『中国の歴史 01～12』講談社、2004-5 年／(学術文庫)、2020 年。
- ・『シリーズ 中国の歴史(全 5 巻)』岩波書店(岩波新書)、2019-2020 年。
- ・『シリーズ 中国近現代史(全 6 巻)』岩波書店(岩波新書)、2010-2016 年。
- ・愛宕元『中国の城郭都市：殷周から明清まで』筑摩書房(ちくま学芸文庫)、2023 年。
- ・岸本美緒『中国の歴史』筑摩書房(ちくま学芸文庫)、2015 年。
- ・岡本隆司『世界史序説：アジア史から一望する』筑摩書房(ちくま新書)、2018 年。
- ・リチャード・フォン・グラン(山岡由美訳)『中国経済史：古代から 19 世紀まで』みすず書房、2019 年。
- ・水島司『グローバル・ヒストリー入門』山川出版社(世界史リブレット)、2010 年。